様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４８９

研究課題名（和文）敬語コミュニケーションの成功経験と失敗経験は敬語学習の向き合い方にどう影響するか

研究課題名（英文）Failures and successes with keigo communication in Japanese language learning: how different experiences affect learner attitudes toward keigo

研究代表者
徳間　晴美（Tokuma, Harumi）

明治学院大学・教養教育センター・講師

研究者番号：２０５９８７６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学習者が敬語学習に向き合うか否かには、「成功への期待」（自分はあるタスクをうまくやり遂げることができると思うかどうか）と「価値」（そのタスクをやり遂げることに価値をおくかどうか）が大きな要因として働いており、そのバランスをとりながら敬語学習への向き合い方を調整していると考察した。そして大切なのは、「日本語学習者としてのありたい自分」は、「人としてのありたい自分」の実現に向かう調整の中で変容し続けるのであって、たとえ敬語学習に消極的であっても、「人としてのありたい自分」に向かう過程での調整だと考えれば、その学習者の選択に基づく生き方は充実したものだと言えるという点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多文化化する現代において、人々の相互理解および相互尊重がより重要になってきており、特に敬語を用いたコミュニケーションをどのように行うかが、アイデンティティの保持や人間関係の構築に大きな影響を与えている。本研究では、敬語学習への向き合い方には何が影響しているのかについて、成功経験と失敗経験が及ぼす影響という観点から考察した。敬語学習のあり方を一律的に考えるべきではなく、学習者一人ひとりの生き方、あり方を尊重する大切さを示唆する結果を示した。

研究成果の概要（英文）： The “expectation of success,” i.e., whether the learner believes it is possible to accomplish the task and the “value,” whether or not the leaner places value on the accomplishment, serve as major determiners in the decision to acquire or not to acquire keigo. In this study, I analyzed learners who managed to strike a balance between their expectations and perception of the value of learning keigo, which led to attitude adjustments.
“A person’s ideal self-image as a Japanese language learner” is the sort of thing that will continue to be adjusted as a learner works toward realizing his or her “ideal self-image as a human being.” Therefore, even if a learner does not seem proactive in mastering keigo, I came to see that those changes occurred in conjunction with them striving toward their id¬eal self-image as a person. It is noteworthy that allowing learners to make their own choices, based on their own way of living, yielded satisfactory outcomes.

研究分野：待遇コミュニケーション教育

キーワード：敬語学習への向き合い方　成功経験　失敗経験　期待価値理論　人としてのありたい自分　日本語学習者としてのありたい自分

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

敬語の教育は、語レベルでの「敬語教育」から、人間関係や場に関するコミュニケーション主体の認識を重視した「敬語表現教育」（蒲谷他 2006）へ、さらに、場面の重要性に加え表現行為と理解行為の双方向性を考えた「敬語コミュニケーション教育」（蒲谷他 2010）の必要性が指摘されてきた。「敬語の指針」（文化審議会 2007）においても、敬語の役割とは、人が言葉を用いて自らの意思や感情を人に伝える際に、単にその内容を表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らとの人間関係・社会関係についての気持ちの在り方を表現するというものであると述べられている。そしてそれは、その都度、主体的な選択や判断をして表現する「自己表現」であるべきだ（pp.5-7）とされている。

敬語使用における「主体的な選択や判断」とは、日本語の母語話者に限らず、学習者にも同様に保障されるべきであるが、日本語教育の分野において、敬語を用いる学習者の主体的な認識に焦点をあてた研究はいまだ限られている。

そこで、研究代表者は表現形式の複雑さ故に挫折しがちである敬語学習に関して、学習者はどのような気持ちで敬語学習に向き合っているのか、過去の成功経験および失敗経験に焦点をあて、そこから得た認識や感情を分析することとした。敬語コミュニケーション教育において、その根底にある学習者の認識面や心理面に目を向け、その繊細さを描き、尊重の重要性を示す研究として位置付けることを目指した。

２．研究の目的

日本語学習者の敬語学習に対する向き合い方は、過去の成功経験あるいは失敗経験、また将来への展望との間にどのような関係があるのかを調査し、明らかにすることを本研究の目的とした。具体的には、以下の３つである。

目的１：学習者の敬語を用いたコミュニケーションにおける成功経験および失敗経験と、現在の敬語学習への向き合い方についての理論記述を行うこと。

目的２：学習者に内在する「敬語コミュニケーション観」と敬語学習への向き合い方にはどのような関係性があるかを明らかにすること。

目的３：目的１と２を踏まえ、学習者の個々の経験や認識の尊重を根底に据えた、敬語コミュニケーション教育への示唆を示すこと。

これらの目的を掲げた研究の実施には、次のような点で意義があると考えた。第一に、形式に関心が向きやすい「敬語」を扱う教育分野において、コミュニケーション主体である学習者個々の経験やそこから形成される認識に目を向け、その動態性を描こうとする点。第二に、日本の社会やコミュニティに参加する学習者が増加する社会の中で、上下や親疎、役割や立場といった、実社会での複雑な状況と深く関わる「敬語コミュニケーション」に焦点をあて、学習者の自己実現の支援を目指している点である。

３．研究の方法

研究の方法は以下のとおりである。

（１）関連文献の検討

日本語教育分野における敬語コミュニケーションに関わる理論研究及び実践研究についての文献をおさえつつ、学習者のアイデンティティー形成に関わる社会心理学や、コミュニケーション社会学などについて考えを深めるため、視野を広げて文献調査を行った。

（２）学習者に対する調査Ⅰ

調査Ⅰは、敬語学習を経験した中級段階の学習者が、現在敬語学習に対してどのような向き合い方でいるのか、またその理由を把握することを目的に都内の大学で質問紙調査の形式で実施した。調査は、４学期に渡って実施したが、いずれも調査協力に同意をした学習者に対し、授業時間外に行った。調査趣旨説明書および同意書、質問紙は日本語と英語で作成し、回答も両言語可とした。（なお、本研究の実施にあたっては、当時の所属先における研究調査倫理審査会において承認を得た。）

質問紙は選択式と記述式からなるもので以下 6 つの項目について尋ねた。

項目 1：敬語の学習経験と理解度（自己評価）

項目 2：現在の敬語学習の状況

項目 3：今の自分にとっての敬語学習の必要性とその理由

項目 4：今後の敬語学習意欲とその理由

項目 5：敬語を用いたコミュニケーションにおける成功経験の有無と印象的だった経験

項目 6：敬語を用いたコミュニケーションにおける失敗経験の有無と印象的だった経験

（３）学習者に対する調査Ⅱ

調査Ⅱは、調査Ⅰの結果を受けて、成功経験および失敗経験は現在の敬語学習への向き合い方にどのようなつながりを持っているかについて質的に捉えることを目的とした。調査対象としたのは、調査Ⅰの項目5および項目6の自由記述欄に回答した学習者のうち、調査協力に同意した学習者である。

調査は、調査者との1対1のインタビュー形式で約30分間行った。インタビューでは、調査Ⅰの項目1～項目4を確認した上で、成功経験（項目5）および失敗経験（項目6）で感じたことや考えたことを具体的に語ってもらいながら、それらが現在の敬語学習への向き合い方に影響しているかを捉えるための質問を取り入れ、半構造化インタビューの形で進めた。インタビューデータについては、語られた内容をコーディング化し、質的に分析した。

４．研究成果

（1）関連文献の検討

まず、日本語教育において、これまでどのように敬語教育が行われてきたかその変遷を追ったところ、初級段階から導入する重要性を確認すると共に、敬語教育の留意点として、待遇コミュニケーション（蒲谷 2003）の重要な観点でもある「場と人間関係」や「自己表現」が日本語教師の間でも意識されるようになっていることを確認した。中でも、学習者がそれぞれのアイデンティティーを保ちながら日本語を学んでいることから、多文化化する現代において、基本的な相互理解が重要であり、敬語を用いたコミュニケーションにおいて、相互尊重の意識が学習者間そして教師間においても醸成されることが不可欠であることがわかった。

（2）学習者に対する調査Ⅰ

敬語学習への向き合い方については、本研究では敢えて、敬語学習の関心の有無に条件を設けずに総合的な日本語科目の履修者を対象に行ったことで、偏りのない多様な学習者の実状を捉えることができた。中級段階の学習者であったため、大半が敬語の学習経験があったが、敬語を学んだ際の苦手意識や、必要性に疑問を抱いた学習者の場合、敬語学習に向き合う動機が持てないことから、敬語学習に向き合う姿勢になかった。また、敬語学習に消極的な学習者については、敬語を使った実際のコミュニケーションでの成功経験あるいは失敗経験がないことも事例として多く見られた。一方、成功経験に限らず、失敗経験も持ち合わせている学習者が、その両方の経験を経て、結果的に敬語学習に積極的に向き合おうとするに至っている事例も珍しくなく、成功経験であれ失敗経験であれ、実際のコミュニケーション場面での実践から学習者は多くのことを感じ、自分はどのような日本語を使えることを目指すのかといった内省が行われていることが考察された。中には、成功経験と失敗経験の両方の経験を得ながらも、敬語学習に消極的な学習者も見られた。しかしそのような学習者について考察してみると、学習者が内省している枠が「日本語学習者としてのありたい自分」の中においてではなく、その外側にある「人としてのありたい自分」の枠においてであったと考察された。

（3）学習者に対する調査Ⅱ

学習者それぞれの敬語学習経験や実際のコミュニケーション場面での経験そのものは非常に個別性の高い内容であるが、その事例を質的に分析した結果から、次のような考察を行った。

まず、学習者が敬語学習に向き合うか否かについては、「成功への期待」（自分はあるタスクをうまくやり遂げることができると思うかどうか）と「価値」（そのタスクをやり遂げることに価値をおくかどうか）が大きな要因として働いており、そのバランスをとりながら、自身の行動、ここでは敬語学習への向き合い方を調整していると考えられる。中には、敬語は難しいが、日本で仕事をするには敬語が必要になるため学ばなければならないという学習者もいる。このような場合は、敬語が習得できること自体に価値を見出しているのではなく、敬語を習得して日本で仕事がしっかりとできることに対して学習者が価値をおいている。そして、この「価値」については、日本語学習に対する強い信念や高い目標、さらには人としてアカデミックバックグラウンドを重視する考え方といった、日本語学習の範囲を超えて安定的な土台を持っている学習者もいれば、成功経験や失敗経験を経ながら、喜びや達成感、心配や悲しい思いといった情意的な要素が刺激され、日本語のコミュニケーションにおける敬語使用の重要性を認識するケースもある。

「価値」が見出され、「成功への期待」が持てる学習者であれば、敬語学習は前進するはずであるが、敬語学習の「価値」は理解できるものの、「成功への期待」が持てない学習者は、敬語学習に向き合う選択をしないこともわかった。しかし、このことを日本語教師や学習者自身が必ずしも憂えるべきではないことも、本研究の結論として述べておきたい。

学習者は、「日本語学習者」と呼ばれることもある「一人の人間」であるという大前提がある。学習者を総体的に捉えた場合、学習者は「人としてのありたい自分」を追い求めながら生きる存在であるはずである。その中に、「日本語を学ぶ自分」という側面があり、思い描く「日本語学習者としてのありたい自分」がある。そこには、敬語学習にどの程度の期待と価値をおいて日本語を学ぶかという個々の考えが伴う。大切なのは、「日本語学習者としてのありたい自分」がどのようであるかは、「人としてのありたい自分」の実現に向かう調整の中で収縮したり変色したりしているのであって、たとえ敬語学習に消極的であっても、「人としてのありたい自分」

に向かう過程における調整故に生じていると考えれば、その学習者（一人の人間）の選択に基づく生き方は充実したものと言えるのである。

＜引用文献＞

① 蒲谷　宏「待遇コミュニケーション」の研究と教育、待遇コミュニケーション研究、1 号、2003、1―6、2010
② 蒲谷　宏「待遇コミュニケーション」における「場面」「意識」「内容」「形式」の連動について、早稲田大学日本語教育研究センター紀要、19 号、2006、1―12
③ 蒲谷　宏、金　東奎、吉川　香緒子、高木　美嘉、宇都宮　陽子、敬語コミュニケーション教育、朝倉書店、2010
④ 文化審議会、敬語の指針（答申）、文化庁、2007
＜http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf＞
（2020 年 3 月 1 日閲覧）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 徳間　晴美	４．巻 17
２．論文標題 日本語学習者の主体的選択に委ねられる敬語学習への向き合い方	５．発行年 2020年
３．雑誌名 待遇コミュニケーション研究	６．最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.32252/tcg.17.0_52	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 徳間　晴美
２．発表標題 中級日本語学習者の敬語学習に対する向き合い方を左右する要因とは何か―成功経験と失敗経験に着目した事例分析から―
３．学会等名 日本語教育学会（関西支部集会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 徳間　晴美
２．発表標題 敬語学習の大切さと大変さの狭間にいる学習者-「完璧」を求めない学習者の事例分析-
３．学会等名 日本語教育方法研究会　第53回研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年12月　待遇コミュニケーション学会第4回研究発表会（於　早稲田大学）にて話題提供者として発表 「日本語学習者の敬語学習への向き合い方を方向づけるものは何か」（徳間　晴美）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考